神奈川・永福寺跡（ようふくじ）

1　所在地　神奈川県鎌倉市二階堂

2　調査期間　一九八八年度調査　一九八八年（昭63）八月～一九八九年二月

3　発掘機関　鎌倉市教育委員会

4　調査担当者　福田　誠

5　遺跡の種類　寺院跡

6　遺跡の年代　一二世紀末～一四世紀前半

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は鎌倉旧市街地の北東に位置し、ＪＲ鎌倉駅の北東一・八kmにあたる。遺跡地を中心に西ヶ谷・杉ヶ谷・亀ヶ谷・獅子舞などの谷が伸びる一画で、「二階堂」という地名が残る。古くから永福寺跡とされてきた場所であり、これまでの調査によりその伽藍配置などが明らかとなっている。本堂である二階堂を中心に、両脇堂と呼ばれた阿弥陀堂・薬師堂が東向きに並び建ち、堂前面の庭園に向かい翼廊がのびる。また正面には橋が架けられ、奥の谷筋より遣水が引き込まれ、三堂の前面に設けられた池に注いでいた。このような伽藍配置は、浄土寺院の中に翼廊・釣殿など貴族住宅的な寝殿造を取り入れていることにその特徴がある。

（横須賀）

池中からは膨大な瓦が出土し、その組みあわせや文様、形態などから、Ⅰ期（一一九二年～一二三二年）、Ⅱ期（一二三五年～一二八〇年）、Ⅲ期（一二八七年～一三一五年）に区分される。その他の出土品としては舶載・国産陶磁器、かわらけ、木製品、金属製品、石製品などがあるが、とくに池中からは漆塗りの台座・机脚・蔀や金銅製飾り金具・螺鈿器物といった堂内荘厳具が出土している。

木簡はいずれも池から出土した。(1)は北翼廊先端部の池底、(2)は北翼廊前の池中から出土した。池汀線周縁部で出土した瓦類が、前述のⅠ期・Ⅱ期が大部分を占めることや、遺構の変遷過程から、木簡はともに一三世紀後葉の遺物と考えられる。

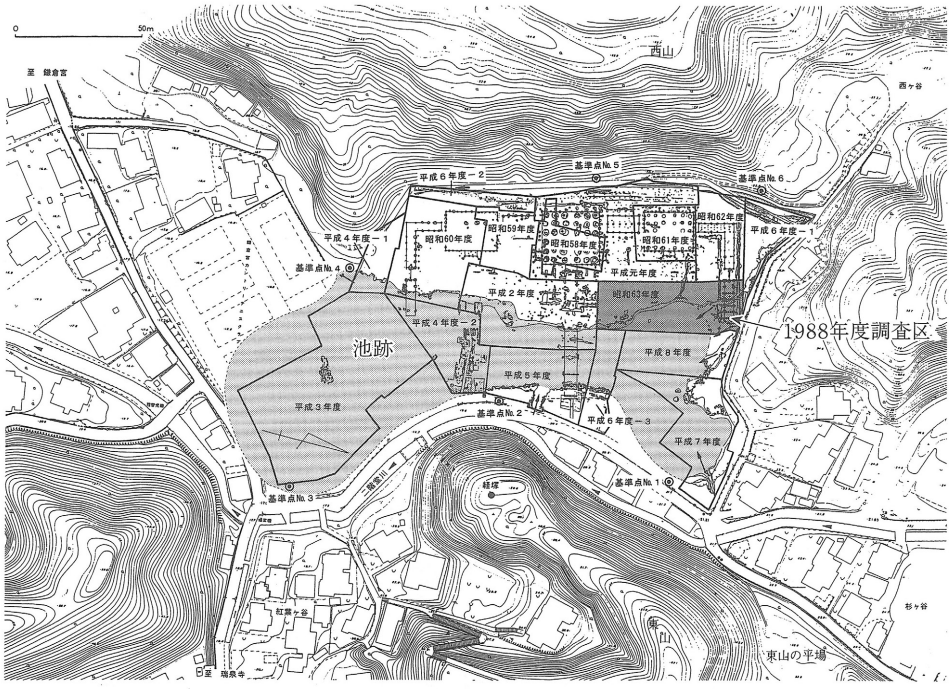
8　木簡の釈文・内容

(1)　「南無□□」　(133)×28×3　061

(2)　・「南無阿弥陀仏」
　　・「南無阿弥陀仏」　128×18×4　061

(1)(2)ともに板塔婆の一種と考えられ、厚さ三㎜程度の経木でできている。(1)は先端部に五輪塔を削り出し、「南無」が読み取れる。先端部に五輪塔を削り出した板塔婆は絵画史料の「餓鬼草紙」や「七十一番職人歌合」などにも見られる。市内出土の類例としては、北条時房・顕時邸跡で検出された若宮大路西側溝出土のものがある（本誌未報告。北条時房・顕時邸跡発掘調査団『北条時房・顕時邸跡』七、一九九九年）。この塔婆は表裏両面に「南無弥勒菩薩」と書かれている。また永福寺跡内からもその後の調査で他に二点の五輪塔を模った塔婆が出土している（本誌未報告。鎌倉市教育委員会『永福寺跡―平成八年度』一九九七年）。

(2)は頂部を山形に整形し、その下の両脇に二カ所ずつ切り込みが入る。表裏両面に「南無阿弥陀仏」と書かれる。同様のものは鶴岡八幡宮研修道場用地内（本誌第八号。鶴岡八幡宮境内発掘調査団『研修道場用地発掘調査報告書』一九九三年）や、北条小町邸跡検出の若宮大路東側溝（本誌未報告。原廣志「北条小町邸跡雪ノ下一丁目三六九番ノ一」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』一四、一九九八年）など鎌倉市内各所で出土しており、その使用形態についても注目される。いずれも頂部を圭頭状に整形し、その下に一カ所もしくは二カ所の切り込みをもつものであり、名号や真言を書写したものなど様々であるが、「南無阿弥陀仏」の墨書が入ることが多い。当遺跡内でもその後の調査で何点か類似したものが出土している。



永福寺跡調査位置図

鎌倉市内では、(2)のような先端部が圭頭状のものと比較すると、(1)のような五輪塔が削り出された形状の塔婆の方が少ないといえ、使用上で何らかの区別があったことが推測される。

9　関係文献

鎌倉市教育委員会『永福寺跡』(一九八九年)
同『永福寺跡―遺構編』(二〇〇三年)
同『永福寺跡―遺構・考察編』(二〇〇三年)

(鈴木絵美)

(1)　(2)表